

東日本大震災と図画工作・美術教育

— 2011～2014 きぼうのてプロジェクトから —

柴崎裕 (しばざきひろし) 東京都 多摩市立豊ヶ丘小学校 主任教諭

〈概要〉

本報告は2011年6月、多摩市立豊ヶ丘小学校5年生の東日本大震災を起点にした図画工作科授業「希望の手の写真作品」製作から始まる『きぼうのてプロジェクト』の3年間を概観する。被災地・大船渡市立第一中学校をプロジェクトパートナーとして『きぼうのてプロジェクト』の輪郭がまとまり、2校の作品交流展覧会から、やがて海外の展覧会に合流するまでの《I期》。東京、岩手、またスペインの小学校を含むプロジェクトパートナーを8校に拡大して本年3月に行われた『きぼうのてプロジェクト2』をみつめた。たからもの『青森八戸・東京多摩 同時開催展覧会2014』3月《II期》までの活動の経過である。本プロジェクトのI期作品は岩手、青森、長野等国内の5か所と、2013年にはフランス・リヨン市(3月)、アメリカ・ニューヨーク国連国際学校UNIS(4月)、スペイン・マドリード(6月)からコリア・デル・リオ市(本年

3月)と、国内外合計9か所で展覧会が開催されてきた。今後さらにスペインの展示が計画されている。本プロジェクトの展開は多くが学習者の主体性に委ねられている。予め計画された学習とは異なり、その時々 の出来事や偶然の出会いが時間をかけて意味づけられ、次の展開が導き出されながら経過を辿る。そのため筆者はそれらの多様な要素を振り返って省察する時間を持つことができている。語るべきことの中に未だ私がいるからである。本報告は美術教育実践を核とするのだが、いわゆるその実践を詳細に検討する報告と趣は異なる。本報告の主な目的は長い経過の途上に立ち「震災を前にして図工・美術教育に何ができるのか」を記すことである。そのためにプロジェクトの前段に着目し、取り組まれてきた手立てと経過を詳細に述べ、その上で全体から本プロジェクトの意義を浮き上がらせたい。





きぼうのて すずき さやか Tamasirtu Toyogaokashou 5nen 2011 6

2011年豊ヶ丘小作品「元気のみなもと」

目次

- 1 プロジェクト以前 2011年4月
- 2 プロジェクトの立ち上がり子ども達 2011年5月～6月
- 3 プロジェクト組織・被災地プロジェクトパートナー
- 4 プロジェクト授業の概要
- 5 『きぼうのてプロジェクト』 展覧会概要(1期・2011年～2012年)
- 6 展覧会参観者メッセージ
- 7 海外の展示と第II期の展開へ 2012年～2014年
- 8 成果と課題

1 プロジェクト以前

2011年4月

図画工作・美術科は東日本大震災を捉えて何が可能なのだろうか。図画工作科・美術科の題材設定に於いて、季節の移り変わりや時々の催事、学校文化に位置づく行事などが大きく関わることは、ごく自然なこの教科の在り方であろう。外界に接する子どもたちの身体感覚、気持ちの在りようを敏感に捉えて題材設定することができれば、この教科が目標とする「つくり出す喜び」に無理なく迫ることができからだ。そのような教科運営が途切れることなく営まれることが、私たち教師の願いである。

東日本大震災は、わが国の生活基盤を揺さぶり、環境問題、エネルギー問題など持続可能性に向けての課題を鮮明にした。子どもたちの日常もまた否応なくそれらの課題に晒されている。どこかこわばる子ども達の身体を前に、その教科の願いにも亀裂が走る。つくり出す喜びは楽しい活動を求めているのだが、日常を奪われ苦悩が広がるにも尚、楽しい活動を私たちは求めなければならぬのだらうか。

また、こうも考える。私たち美術教育に携わる者は、抗しがたい不安な状況に置かれた人々が、何がしかの表現に向かうことよって自ら活力を取り戻し、生きる糸口を見つけ

る不思議を知っている。それは如何なる人間の仕組なのか私にはわからない。ただ「一人間に美術が生成すること」：そんな人間の根源的な営みだと思ふ。3・11は図工専科教師の私に、普段意識することのないその事実を目を向けさせた。そう考えれば、今こそ表現が必要なのだ。しかし私は「何ができるのか：何をすべきか」と、あの時誰もが逡巡し、身動きのできない、同じあの戸惑いの中にいたのだ。

やがて被災地の混乱がひとまず落ち着きを取り戻し、学校が再開され図工・美術の授業も再開されていく。そこに立つ教師の苦悩はどのようなものだったろうか。「何ができるのか：何をすべきか」がより切実に横たわっている。被災地現場の苦悩の前に私はただ口をつぐみ、息を飲む。：そしてもう一度考える。子どもたちはその苦悩の最中にも表現し、発信せずにはいられない存在だ。取り立てて図工の授業を取り上げずとも、あらゆる場面で五感を駆使し、時々の世界を感じ取り解釈を繰り返して、「自分と共に世界を更新」しているのだ。私は震災の困難さの傍らにも、子どもたちのしたたかさが見失われることはない、と信じているのだ。そのようにして私は「何ができるのか：何をすべきか」を問い続けながら、何が見えるその時を待つようになりと考えた。そしてもし、その時が来たから見過ごすこと



はしたくないと考えた。今振り返ると、このプロジェクトの始まりはたぶん、このようにして緩やかに待つことだったのである。

2 プロジェクトの立ち上がり と子どもたち

2011年5月～6月

「希望の手って、どんな手…?」と、希望の形を手で表す。それほとでも小さなアクションの、直ぐにも消えてしまいそうな小さな遊びである。子どもたちの周りには名前の無い、生まれては消える小さな遊びが満ちている。いつでもどこでも、何もなくても可能なこの小さな遊びに、私は光を当てたいと考えた。そして一瞬の遊びを定着するために写真を使って授業を思い描いた。既に私はこれ

までの実践からデジタルカメラを手にするだけで、子どもたちが活性化することをよく知っていた。また今や子どもたちにとって、写真によるビジュアル表現は身近なものであり、その環境を積極的に楽しもうとする子どもたちがいることも確認していた。5月、多摩市立豊ヶ丘小学校・図画工作科5年授業において「被災地を励ます写真作品をつくらう」と本題材『きぼうて』を投げかけた。そして同時に、本校の活動を起点に被災地でも同じ活動呼びかけを授業支援すること、また可能であれば、作品交流展示等を相互で行うことなどを想定した。本題材設定の理由は以下の通りである。

- ① 写真作品の作製は、カメラ機器の提供さえあれば、教材・教具等の不足する被災地であっても自由な活動を保障することができらるだろう。
- ② 「手」は、自分自身も意識できないような感情を表出する部位であり、その時々々の「私の在り様」をそれとなく表しているだろう。
- ③ 危機的な状況のなかで、子どもたちは抑圧されているかもしれない。そのような抑圧下にある「手」をテーマにした小さなアクションを促すことよって、「私を解放」し「私を取り戻すこと」ができるだろう。
- ④ 被写体を「手」にすることで、手の表情を捉えたり、ポーズを

考えたりしながら、活動をするうちに次第に複数の「手」を被写体にすることを考えるだろう。相談相手を自由に選ぶことを促し「希望」という未知の形について、自然に他者とのコミュニケーションが生まれるだろう。

以上のように題材を設定したが、被災地のプロジェクトパートナーが決まっていな段階で、活動を具体的に想定することに不安を感じていた。被災地の子どもたちが実際にどのような体験をしているのかが分からないまま、このような内容を振りかざしてよいのだろうか。そこで、よりプロセスに着目し「被災地の子どもたちとカメラをもとに、自由なコミュニケーションのやりとりをする」という活動を進める主な想いと変わって行った。以下は豊ヶ丘小学校で、子どもたちにプロジェクトを投げかけた導入時の様子である。東京の子どもたちは、彼らの言葉で私と同じ逡巡を言葉にしている。

◆豊ヶ丘小2011年5月26日

5年1組導入時の授業ドキュメント
「被災地の人たちは勇気付ける元気の出る作品をつくらう」と問いかけたところ、「誰が見てくれるのかな?」「つくっても誰も見てくれないんじゃないかな…」「そうだ被災地に送ればいい」「避難所とかに展示してもらえばいい」(しだいに教

室に熱気が広がっていく)
しかし、このとき、クラスの数人の男子から「大変なときにそんなこと迷惑だよ」「それは自分勝手だよ」と意見が出され、子どもたちは静まりかえった。被災者の心情は、作品を見るところではないというのが彼らの意見だった。この実にもっともな指摘をめぐって、なかなか次の意見が出ない様子だった。

そこで私は「震災の色々なニュースを聞くけれど、自分たちだけ楽しく図工をやっているのだから…と考えていた…他に意見がないのなら、今は止めておこう」と話した。すると次に一人の女子が「でも、できることがあれば何かしたい…という気持ちはあるよ」「ここで作品をつくるだけなら誰にも迷惑はかけないと思う…」そんなやりとりから、作るだけはお互い話がつくとまとまった。(今振り返るとこの時、最後の女子の発言がなければここでプロジェクトは終わっていたのかもしれない)



3 プロジェクト組織・被災地プロジェクトリーダー

まだプロジェクトの計画が何も定まらないところ、次の2課題から組織を立ち上げる必要に迫られた。一つは被災地パートナー探しであり、次に写真作品の出力の課題であった。

被災地パートナーについてはその時点で私には全く手がかりがなかった。現時点での企画をまとめ提示することがそのためには必要になる。そこで企画書を作成し岩手大学の『岩手アートフォーラム』に問い合わせ、取り次ぎを仰いだ。しかし、その感触もあまりよいものではなかった。そして私はここでも待つことに努めた。

写真作品を製作する都合上、大きなサイズに出力することがこのプロジェクトの前提となり課題となることが明らかだった。写真を扱う場合、常に出力方法・経費は大きな課題である。できれば児童全員(57名)の作品をA2〜A3程度に出力したい。さらに被災地パートナーを想定すれば、学校の予算では到底賄いきれるものではない。企業などの支援が必要になる。活動環境を整備するプロジェクト実行委員会(大人スタッフ)を設立し、外部組織との連携を図る体制作りが必要になった。そこで私の身近にいる図工専科教師等に声をかけて急造の委員会を設立

2011	内容
5 / 5	・柴崎：企画書作成開始
5 / 10	・柴崎：キャノン立川支社交渉
6 / 9 ~ 17	・多摩市立豊ヶ丘小学校5年 撮影授業(1次/2次:計4時間)
6 / 23	・図工授業/作品選択(40~50分)
6 / 30	・キャノン発送(57点/A2/光沢紙)
7 月上旬	・岩手大学 岩手アートフォーラム: 藁井先生現地調査依頼
7 / 15	・キャノン納品、ハレパネ提供支援
7 / 22	・相手校大船渡市立第一中学校美術部 (柴田利行先生)に決定

した。すると意外なことに、その実行委員メンバーの一人が岩手大学の出身者であり、大学同級生の大船渡市立第一中学校・柴田利行先生への連絡が取れ、被災地パートナーとしてプロジェクト参加がまとまった。

一方、子どもたちとも全ての情報と課題を共有し、その都度、展開の設計を子どもたちの発想に求めるために「きぼうのて子どもスタッフ」を募集し、直ぐに12〜15名のメンバーが集まった。子どもスタッフは出入り自由で柔軟な組織とし、必要な人材があれば子どもたちで探し、スタッフに呼び込むことなどを確認した。実作者はあくまでも子どもたちである。プロジェクトの進行上の様々な課題について、子どもスタッフに意思決定を委ねる方針を提示し

た。以下にスタッフの構成とその間の活動を表まとめた。

◆大人スタッフ

- (1) 東京スタッフ
 - 柴崎 裕(委員長)、本間基史(副委員長)・元東京都図画工作研究会理事(長)、荒 文香(事務局長)
 - 多摩市立多摩第三小学校、池田 頼太(日野市立潤徳小学校)、河原賢一(当時・八王子市立横山第一小学校)、辻政博(元東京図画工作研究会々々)
- (2) 岩手スタッフ
 - 柴田利行(当時・岩手県大船渡市立第一中学校)
- (3) 活動協力者
 - 長田謙一研究室(当時・首都大学東京)

(4) 支援協力団体

- ① A P A (日本広告写真家協会)
- ② キャノンマーケティングジャパン
- ③ 東京都図画工作研究会
- ④ N P O 法人市民の芸術活動推進委員会
- ⑤ 全日本教育材料連合会

◆子どもスタッフ(15人)

- 2011年9月〜2012年5月現在
- ・5年生2クラスより自由参加
 - ・企画立案
 - ・5年生全体への連絡調整
 - ・外部団体、協力者との連絡(手紙/電話)
 - ・展覧会挨拶文、アンケート用紙等作成
 - ・アンケートへの返信



2011年豊ヶ丘小作品、「ビー玉は世界だ、新しい世界を切り開く手」
作品には子ども達が作成したキャプションが添えられている。

4 プロジェクト授業の概要

左表にプロジェクト授業（写真撮影）の詳細をまとめた。

◆豊ヶ丘小学校

多摩市立豊ヶ丘小学校 5年図画工作授業（2クラス：57名） 指導者：柴崎 裕 補助：5年担任、松井有紀枝（多摩市立東愛宕小学校）・荒 文香（多摩市立多摩第三小学校）	
2011・日付	内 容
	<ul style="list-style-type: none"> デジタルカメラ 40台：日本広告写真家協会より貸与 出力：キヤノン マーケティングジャパン
5月26日	<p>『きぼうのて』導入授業</p> <p>①写真作品（数年前の児童作品）のギャラリートーク、写真作品表現の多様性の確認</p> <p>②『きぼうのて』ワークシートをもとに（50分） ガイダンス／「希望」の言葉をもとにコンセプトマップ作製／アイデアスケッチの作成、シーン、ポーズの検討／次週の撮影に必要なものを用意する</p>
6月9日～ 6月17日	<p>撮影授業</p> <p>デジタルカメラ 40台：A P A（日本広告写真家協会） OLYMPUS デジタルカメラ μ（ミュー） 設定：5メガ、フラッシュカット、手ぶれ機能ON</p> <p>①第一次撮影1回約40分（諸注意＋撮影）</p> <ul style="list-style-type: none"> 校庭、自然林、校舎内、ウォームアップ 始めは個人撮影で 撮影道具を用意する者：7～8人 道具の貸し出し：アクリル板・鏡（大～小）等 子どもたち：ビー玉・ボール・ビーズ・地球儀 <p>②希望者へカメラの貸し出し（1泊2日＝12～13人が持ち帰った） 昼休み、放課後活動（12人） ③授業事後処理・データ管理</p>
	 <p>撮影風景</p>
6月13日	<p>④第二次撮影 50分程度</p> <ul style="list-style-type: none"> アイデアスケッチをもとに撮影／前半（25分） 電子黒板で撮影経過のシェア 撮影／後半（25分） データ取り込み作業
	
6月23日	<p>⑤作品選択（P C ルーム）40分～50分程度</p> <ul style="list-style-type: none"> 撮影写真（200枚～40枚）のなかから1点を選択する 作品キャプションの作成（作品に添える短い文章の作製） 全児童個別作品P C 完成フォルダファイル用意
6月23日～	⑥事後処理／ロゴ作成／作品にロゴ挿入／キヤノン マーケティングジャパン発送

子ども達は手渡されたカメラを自由に使いこなした。様々な人に相談し協力してもらってもよい...という通常授業から離れた枠組みが新鮮に受け取られていたようだ。平均すると40枚程度、多い子で200枚の写

真を撮影し、その中から作品にする1点を選んだ。手のポーズを工夫するだけでなく、友達の何気ない「手の一瞬の表情」を選んだり、撮影場所へのこだわり（特に大船渡の場合は校庭が仮設住宅地となっており重

要なテーマとなっていた）や、光と影に着目したり、動物や植物（生命）と手、母親の手と私の手...などの工夫が広がり、そこには子どもたちがそれぞれの製作ストーリーが生まれて

◆大船渡市立第一中学校 美術部活動（部員：18名）

指導者：柴崎 裕（多摩市立豊ヶ丘小）、柴田利行（当時大船渡市立第一中学校） 河原賢一（当時八王子市立横川小）、池田頼太（日野市立潤徳小）、 補助：辻 政博 特別参加：長田 謙一（当時首都大学東京） デジタルカメラ貸与20台・出力：キヤノン マーケティングジャパン	
2011・日付	内 容
事前授業	美術部活動で事前にアイデアスケッチ／撮影用諸道具の選定や準備
8月27日 13：30～ 16：00	<p>①顔合わせ、散歩トーク、ガイダンス（20分）</p> <p>②導入、カメラの使い方、ウォーミングアップ撮影（40分） 校舎内／グラウンド／仮設住宅前（校庭は仮設住宅地として、運動が行えない状態だった） カメラ設定：5メガ、フラッシュカット、手ぶれ機能ON</p> <p>③ウォーミングアップ撮影のシェア（電子黒板）、トーク（20分） 豊ヶ丘小の『きぼうのて』児童作品1点でギャラリートーク</p> <p>④撮影（40分） ⑤授業事後処理・データ管理</p>
8月28日 10：00～ 12：30	<p>⑥作品選択（P C ルーム） 60～40点から1点を選択／作品写真にロゴ／名前を配置／作品キャプション作成</p> <p>⑦完成作品のシェア／全員の作品を見ながらトーク</p> <p>⑧まとめ（授業事後処理、データをキヤノンに発送）</p>

第49回教育美術・佐武賞 佳作賞

展覧会名	出品数	会期	場所	入場者数
『きぼうのて』作品：全75点 ＝多摩市立豊ヶ丘小学校5年(57点)＋大船渡市立第一中学校美術部参加部員：18点 *特別展示の場合(以下の数を選定し展示) 多摩市立豊ヶ丘小学校12点＋大船渡市立第一中学校12点				
第15回図工だいすき子ども美術展*特別展示	24点	2011.9 / ~ 10 / 6	渋谷区こどもの城アトリウムギャラリー *岩手作品は後半に展示を追加	3,873
岩手県『アート@つちさわ<土澤>2011』展	全作品75点	2011.10 / 8 ~ 11 / 6	岩手県土澤 萬鉄五郎記念美術館 展示会場：大徹屋	18,000
岩手県 大船渡市立第一中学校文化祭	全作品75点	2011.10 / 22	岩手県 大船渡市立第一中学校美術室	100
多摩市立豊ヶ丘小学校第1回 開校記念展覧会	全作品	2011.11 / 10 ~ 11 / 13	多摩市立豊ヶ丘小学校体育館	500
第50回東京都図画工作研究会南多摩大会	24点	2011. 12 / 16	多摩市立豊ヶ丘小学校体育館	800
美術科教育学会・現代A E部会 *特別展示	24点	2012. 2 / 18	東京学芸大学 美術科ホール	20
『きぼうのて』プロジェクト TAMA・HACCHI 同時開催展覧会 2012 ~ 東日本大震災復興支援…子どもたちがつなぐ八戸・大船渡・多摩~展	全作品75点	2012.3 / 3 ~ 3 / 18	青森 八戸ポータルミュージアムはっち	3,927
	全作品75点	2012.3 / 9 ~ 3 / 11	東京 パルテノン多摩 市民ギャラリー	484
「きぼうのてプロジェクト・朝日村から」展	全作品75点	2012.6 / 10 ~ 7 / 8	長野県 朝日美術館	300

*キヤノンマーケティングジャパン様のご支援により、全作品(75点)を2セット出力をしていただいたため、2会場での同時開催展覧会をすることが可能となった。

5 『きぼうのてプロジェクト』展覧会概要
(I期・2011年~2012年)
岩手『アート@つちさわ2011』展覧会への出品は、岩手に授業に参加された協力者・長田謙一先生のご尽力によって実現することになった。またこの展示を八戸ポータルミュージアムはっちの館長様がご覧になったことから、八戸・多摩の同時開催の可能性が開かれていくことになった。I期作品の展覧会を左の表にまとめた。

◆岩手県 萬鉄五郎記念美術館 「あーと@つちさわ<土澤>2011」展 2011年11月16日

NO	お名前	メッセージ(全65通)	連絡先
1	木村 桂子	『きぼうのて』とてもすばらしかったですよ。常日頃、気づかない手のこと！よきことによく気が付いてとてもすばらしかった。私も少しは絵と仲良くしているお母さんです。生きているよろこびの手、これから大事にしよう。題名も心を打ちます。	○花巻市
5		伝えようという気持ちはとても大切だと思います。みなさんの想いは作品を見てくださった人達に、きちんと伝わりました。	盛岡市
7	岩井 雅人	手だけで、様々な写真ができていてとてもよかったです。娘と二人で見に来ましたが、しっかり手をつないで、歩いて行きたいと思いました。いつか機会があれば、岩手に遊びに来てください。	○盛岡市
8		ありがとう。わたしのおじいちゃんや、おばが釜石で亡くなりました。合計7名。みんなからはげましが一番の元気の源です。	
21	ミヤダテキミヨ	とても「手」を通じて、あたたかさやつながり、きずななど色々な想いが想像できました。希望をつかむ、夢をつかむ、愛する人と手をつなぐ…。手はとても大切な体の一部だと感じました。	○
26	千田 真弓	とてもきれいで、あたたかい写真で、撮影したみなさんの人を思う気持ちを映しているように思いました。誰かのために何かできたら、とって行動するのはとても大切なことで、その強い思いが伝わってきました。ステキな写真をありがとうございます。	○盛岡市
57	山中 えみ子	胸がしめつけられ、涙が出てきました。次の世代をになう若者達が、希望に向かって生きていてくれると思い、自分もがんばって行こうと思うことができました。ありがとう	

6 展覧会参観者メッセージ
それぞれの会場に子どもスタッフで作成したアンケート用紙を置いた。つちさわ展は、「被災地を元気づける」とした作品が、初めて東北の一般の方々に向けて展示される機会となる。このプロジェクトがどのように受け入れられるのかが私たちの大きな関心事だった。以下はその「あーと@つちさわ<土澤>2011展」と、震災後1年目に行った青森・多摩同時開催展覧会に寄せられたメッセージ(全…139通)からの抜粋である。

◆同時開催展：八戸 2012年3月18日

NO	お名前	メッセージ (全51通)	連絡先
9	道合 政邦	多摩市立豊ヶ丘小学校のみなさんへ 3月3日(土)ひなまつりの日、「はっち」でみなさんの「きぼうのて」写真展を拝見しました。そして大きな感動と感銘を受けました。特に、この日、午後4時からのギャラリートーク(柴崎先生)は、大変有意義でした。私は感動のあまり3回も発言しました。私はチリ津波を体験し、その立場から考えを言いました	○
18	福田 昭平	なにげない日常に、みなさんの手が入ることにより、生きている実感がわきました。みんなで手をつないで撮っている写真が印象に残りました。様々な人がいる世の中ですが、みんなで手をとりあって生きていける世の中になれることを願います。このような写真展を開いていただきありがとうございました。	○
23	千葉 華子	みなさんの手にこめられた想い。心にひびきました。一所懸命にのばした手のその先に、必ず明るい明日があると教えられました。	○
32	木村 日末子 兵庫県 神戸市	それぞれの感性、優しさが、それぞれの日常の延長にあり、それが、描かれていると感じました。子どもの作品はテクニック以上の響くものがありました。ありがとう。	
35	大船渡出身のおばあちゃんより	豊ヶ丘小のみなさん、すばらしいことを思いつきましたね。そのやさしい心を写真からしっかり受け止めました。「なんと、ぶくぶくしためんこい手だこと」。このかわいい手が大きくなり、丈夫な手となり、働いてくれるのですね。感激しました。	
39	青森八戸市 千春(41歳)	どの写真も、優しく、美しく、まさに「希望の手」がそこにあると思いました。この子たちが、新たな未来を作って行くのだな、日本の未来は明るい…そう思いました。心が暖かくなりました	
45	匿名	皆さん プロの写真家さんのようで。大変驚きました。3.11発生時、私は会社で仕事をしていて、避難した直後、会社は津波に飲み込まれました。どンドン時間は経つけれど、あの日の記憶と皆さんの素敵な写真をいつまでも心に留めようと思います。	メールアドレス

「被災地」の様々な困難にいます。ろう人々に向けて、このプロジェクトを推進しようとする私たちは、これらのメッセージを受け取ることに

よって、初めて作品が作品としての像を結び、このプロジェクトが「暖かい活力の行き交う場」となりうることを確認することができたのであ

る。そしてこのことは私たちに与った。子どもたちは手分けをして、住所のある全ての方に返事を書

◆同時開催展：多摩 2012年3月14日

NO	お名前	メッセージ (全51通)	連絡先
1	田中 英美子	手を思う言葉が、こんなに多くある事に感動しました。一人ひとり個性があるんだなあとうれしくなりました。心があらわれていました。ありがとう。	○ 川崎市
2	原田	「手」の持つメッセージがこのように強く、多様だということを知られ感動しました。「希望の手」の企画はどこから出てきたのでしょうか？	○ 多摩市
9		企画のすばらしさとともに、どの作品も子どもさん達の思いが感じられてすばしかったです。	
16	小川 柴子	皆さんの感性のすばらしさに脱帽です。みんなで希望の国にしましょう。	○ 武蔵村山市
17	長谷 有里子	こういう活動があることに感動しました。場所は違っても子どもは未来の宝です。お互いの思いを大切に、助け合ってください。	○ 多摩市
19	古田	みなさんの作品が多くの人々に見てもらうことで感動を与え、また次の動き・広がりにつながっていくこと、すばらしいです	○ 八王子

いた。

7 海外の展示と第II期の展開へ
2012年〜2014年

第1期の展示を一通り終え、子どもスタッフでプロジェクトの終わりを相談したところ、スタッフの提案で子どもたちの手紙を添えた報告書を海外の美術館、教育機関に送付することになった(7月)。応答のないまま3か月が経過したところ、フランス「リヨン市東日本再生ビジョン展覧会」実行委員会、アメリカ・ニューヨーク国連国際学校(UNISS)の日本人教師会より打診があった(11月)。報告書を受け取った心ある方々が、取り次ぎを重ねて東日本を励まそうと動くこの2者に結び付けてくださったのだ。なかでも、「リヨン市東日本再生ビジョン展覧会」実行委員会は、2013年6月より開始されるスペイン日本友好400周年に向けて同趣旨の展覧会の準備を始めており、その展示内容に『きぼうのて』作品を組み込んだこととの連絡だった。表にその後の海外展示の概要をまとめた。

私たちは東日本震災に想いを寄せる在外邦人の方々が、母国に降りかかる震災をどのような感情で受け止めているのかを、詳細に知ることはなかった。それぞれが想いを具体化しようとするその力は、母国からの距離に比して強い。このことはそ

第49回教育美術・佐武賞 佳作賞

日時	展覧会名	会場
2013. 3 / 8 ～3 / 24	『リヨン市東日本再生 ビジョン展覧会』	フランス・リヨン市 子ども館
2013. 4 / 5 ～4 / 15	国連国際学校 (UNIS) 『春の学園祭』	アメリカ・ニューヨーク 国連国際学校 (UNIS)
2013. 6 / 1 ～8 / 31	『スペイン・日本友好 400周年記念元気な日 本展覧会』	スペイン・マドリッド コンデ・デュケ 文化センター
2014. 3 / 8 ～3 / 21	Mano de esperanza 「希望の手」展	スペイン・コリア・デル・ リオ市 SALA ANDRES MARTINEZ DE LEON

2014 きぼうのてプロジェクト2参加校		
地区	学校名/学年/人数	
東京	多摩市	豊ヶ丘小 6年 (39)
	多摩市	多摩第三小 5年 (56)
	日野市	潤徳小 5年 (130)
	狛江市	和泉小 5年 (89)
岩手	一関市	荻荘中学校 2年 (60)
	宮古市	宮古西中学校 3年 (78)
スペイン	ビセンテ・ネリア小学校 (60)	
参加人数 601		
助成：企業メセナ協議会 GB ファンド 協賛：キヤノンMJ / BSS / GMJ / 株V キューブ		

2014 きぼうのてプロジェクト参観数		
会場	2014年・会期	参観数
バルテノン多摩	3月8～10日	250
ポータルミュージアム はっち	3月5～16日	990
スペイン コリア・デル・リオ市	3月8～21日	3000 (推定)
*スペインの子どもの作品は日本で 展示することはできなかった。		4240



2014年会場で行われた子どもTV会議
青森・岩手・東京・スペインの4会場をネット
回線でつないだ

ある。ここに見られた子どもたちの力をさらに伸長するには、何よりも「子ども達の作り出す学び」に寄り添うファシリテーターとしての教師の、それに連動する学校体制の、そのような教育を支援する高次の教育機関の、幾重にもつながる「意識とシステムの改革」が必要なのである。

ここに集う多くの日本人ボランティアの方々や電話やメールでやりとりをするなかでさらに明らかになった。プロジェクトを続けてほしい：次世代を生きる子ども達に、この震災から学んでほしいと、願いが寄せられたのである。「きぼうのてプロジェクト」は世界の子どもたちが無理なく開けることのできる「学びの扉」だと言っているのである。ところが私たちはそのとき、この国の日常で震災が薄れ、忙しさに追われてプロジェクトを継続する力を失いかけていたのである。直接に見る者に働きかけ、言語や文化を越えて何かを伝えようとする美術の可能性：私達図工教師はその本質を改めて噛みしめた。そして投げかけられたその想いから、もう一歩前へと駆り立てられること

作品製作は図画工作科・美術科授業の大半の時間を占める活動である。本プロジェクトのその活動は東日本震災という特殊な状況のなかで表現を受け取る他者について、想いを馳せることだった。製作する東京・岩手・スペイン・コリア・デル・リオの子ども達は一様に「被災地」への想いを、自分のできる方法で見出そうとしていたのだ。本プロジェクトによって、遠く離れて暮らす子どもたちも、それらのことをよく見極め、優しさを十分に発揮する素朴な表現者たちであることが確認

できた。それらが響きあう展示フロアでは、涙ぐむ方々が少なからずいた。子どもたちの作品は大人達に「自分自身を整えよ：」と静かに伝えていくのだ。本報告の目的である「震災を前にして図工・美術教育に何ができるのか」の結びに、このようにしてプロジェクトが開く「暖かな活力の行き交う場」を置くことにしたい。参観者アンケートに綴られた言葉が何よりもそれを明らかに示している。

「多様な世界とつながり、課題を共有する教育」とは、今、学習指導要領にも明示され、教科を越えて求められる最も必要な教育課題E S D (持続発展教育) の目指すものである。本プロジェクトの道筋は、震災を起点にその時々で局面で子どもたちの発想をもとに展開し、図らずもそのE S Dが目指すものを体現してきた。「つながり」を生むこと：

私たちは学校の日常を越えて、想像以上に大きなステージに辿り着くことになった。しかし、このことをそのまま公立学校の現状に向けた汎用可能なモデルとすることはできない。本プロジェクトは東日本震災復興支援の企業助成金をはじめ様々な協賛企業の支援と、偶然の出会い、出来事によって成立しているからで

8 成果と課題

2014展覧会を実施した。

そこには、地域や文化を越えて広がる美術に、その教育に大きな可能性が託されているのだ。子ども達は多様な出会いに支えられて実施された展覧会や子どもTV会議(2011年、2014年の八戸・多摩同時開催で実施)から、日常生活では出会うことのない被災地、国内他地域、フランス、アメリカ、スペインの人々の交流を経験し、そして参観者からのメッセージを受け取りながら、「自分と世界」をこれから推し量って行くだろう。